

## あとがき

今回の荒川修作展は「無題の形成」と題し、1971～72年の油彩4点(各200号)を11月1日から28日まで展示し、ご覧いただぐものである。東京国立近代美術館では「荒川修作の実験展——見る者がつくられる場——」と題する大規模な荒川修作展が11月1日から12月10日まで開催される。この展覧会は引き続き、京都国立近代美術館(来年1月7日～2月5日)、名古屋市の松坂屋美術館(来年6月28日～7月19日)で開催される。当画廊の荒川修作展はこの大規模な展覧会を意識して同時開催されるものであるが、アラカワの芸術に関心をお持ちの方には、興味ある展覧会であると私は思っている。

この展覧会のテキストは小林康夫さん(東京大学教養学部助教授)にお願いし、「FUROR SANCTUSあるいは荒川修作を読むための方法素描」と題するエッセーをご寄稿いただいた。FUROR SANCTUSとはラテン語で「聖なる激怒」と訳される。その意味するところは小林さんのテキストをお読みいただきたい。私はこのテキストを何度も読み返し、荒川修作の芸術理解のためのすぐれたテキストであることを実感した。かくも手応えのあるテキストをお寄せいただいた小林康夫さんに心から御礼申し上げる。

この展覧会の案内状にはハンス・ゲオルグ・ガーダマー(ドイツの哲学者)のアラカワへの言葉を使用し、カタログの扉にも掲載した。これまで、当画廊では二回アラカワ展を開催しているが、その案内状はすべて言葉である。第一回はイタロ・カルヴィーノ(イタリアの小説家)、第二回はマルセル・デュシャンであった。アラカワの展覧会の案内状が、すべて彼の絵画ではなく、言葉であることは興味深いところである。小林康夫さんのテキストのタイトルも荒川修作を読むための方法素描である。みるためとは言っていないのである。アラカワの作品はみるだけのものではなく読むものなのだ。マルセル・デュシャンは絵画について、網膜的な快楽をけいべつしたが、デュシャンから大きな影響を受けた荒川修作も、そうなのだ。その意味で荒川修作はいわゆる一般の画家ではない。

かつて、現代の日本の画家を一堂に集める展覧会が企画され、主催者から依頼を受けて、私は荒川さん

に出品を依頼したが、彼は言下に断ったのである。彼はいわゆる美術の世界とは別の遠い世界で自分のしごとをしているのである。一緒にされたくないのだ。ぼくはどんなに生活が苦しくても出品することはできない、と荒川が答えたのが、今も鮮明に私の記憶に残っている。

もうひとつの出来事。三年前のこと、私は銀行(農林中央金庫)時代の大先輩である渡辺春香さんから、弟が荒川さんと話したがっているので、仲介の労をとつてほしいとの申し出があった。その弟さんはわが国の分子生物学の権威で、ノーベル賞受賞者利根川進さんの先生である渡辺格さんであった。折から来日中の荒川さんを渡辺さんに紹介し、一夕、銀座のさる料理屋で歓談の機会を設けたのである。何と6時から12時近くまで、このお二人は夢中になって話し合っていたのである。人間の生と死、人間の身体、感覚、記憶等々根元的な諸問題について会話がとり交わされたのである。同席した私はといえば、ただただその熱気に当られ、まじまじとお二人の顔を交互にみつめるのみであった。何故ならば、無学な私にはほとんど理解を超える領域の会話であったからである。その証拠にそこでの会話は今何ひとつ私は憶えていない。しかし、その会話の幾分かは、その現場の熱気にまきこまれて分ったような気持ちになっていた。ただそれだけのことである。このお二人の会話とその情景は感動的であった。気持がよかつた。料理屋の主人がもう店を閉めますのでとあいさつがあり、この対談は中断された。ほっておいたら朝方まで続いたであろう。ここに荒川修作的一面をみるのである。

荒川修作は科学者か？ 哲学者か？ イエスそしてノーである。人間の根元、芸術の根元を問うことは科学者、哲学者のしごとである。荒川はこの問題に取り組んだ画家なのだ。彼の絵画が難解なのは、その対象が難解であるためである。謎めいているのはその対象が謎であるからだ。そして、そこに荒川修作の真骨頂がある。荒川は今日も根元の問題に向かってしごとをしているのだ。

荒川修作夫妻のご健勝を祈る。

1991年10月1日

佐谷画廊

佐谷和彦